The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

| | |
|---|---|
| Title | ＜書評＞松本和也編『テクスト分析入門　小説を分析的に読むための実践ガイド』（ひつじ書房） |
| Author(s) | 寺澤，誠人 |
| Citation | 太宰治スタディーズ　別冊. 2017, 3, p. 27-30 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://hdl.handle.net/11094/62137 |
| rights | |
| Note | |

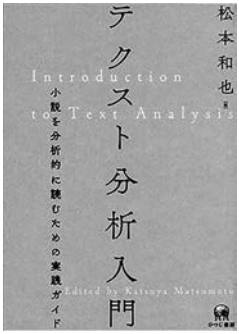
*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

# 書評

## 松本和也 編『テクスト分析入門
## 小説を分析的に読むための実践ガイド』




■目次

第１章　テクストを分析的に読むために
第２章　ウォーミング・アップ —— 夏目漱石『夢十夜』「第一夜」
第３章　知足と安楽死を超えて —— 森鷗外「高瀬舟」Ⅰ
第４章　語ること・見ることとテクストの仕組み —— 森鷗外「高瀬舟」Ⅱ
第５章　謎と反復をめぐるテクストの仕組み —— 森鷗外「高瀬舟」Ⅲ
第６章　“奇蹟”の読み方／読まれ方 —— 芥川龍之介「南京の基督」Ⅰ
第７章　語り手はどこにいるのか —— 芥川龍之介「南京の基督」Ⅱ
第８章　寄生する語り手の欲望 —— 芥川龍之介「南京の基督」Ⅲ
第９章　“名作”が名作になるまで —— 川端康成「伊豆の踊子」Ⅰ
第 10 章　偽装された“現在” —— 川端康成「伊豆の踊子」Ⅱ
第 11 章　通過儀礼としての旅の時空 —— 川端康成「伊豆の踊子」Ⅲ
第 12 章　あふれる“いのち”の文学 —— 岡本かの子「老妓抄」Ⅰ
第 13 章　老妓の物語から「作者」の物語へ —— 岡本かの子「老妓抄」Ⅱ
第 14 章　死を予見し、死を悼む —— 太宰治「桜桃」Ⅰ
第 15 章　語れないことを読む —— テクスト分析の先へ — 太宰治「桜桃」Ⅱ

# 松本和也 編『テクスト分析入門』

## 小説を分析的に読むための実践ガイド

寺澤誠人

テクストを分析的に読む――。テクストを研究の名の下に読むことは、簡単なようでとても難しい。日本近代文学研究の領野では、最大公約数な読み方ではつまらないと言われがちだし、アクロバティックな読み方は、テクストの読解可能性や新たな一側面を提示するという意義を持ちながらも、一方で、自己満足的な解釈ゲームの側面も免れない。そもそも、「テクスト分析」という営為はどういったもので、「テクスト分析」にはなにが必要なのだろう。そして、「テクスト分析」は「読解」や「解釈」とはいかに異なるのだろう。テクストを分析的／研究的に読むというのは、具体的にはどういったことなのだろう。

『テクスト分析入門』は、一面では近代文学研究の必携本でありながら、その性質は、様々な「文化テクストの応用」に可能な、非常にすぐれたテクスト分析のための入門書である。

第1章でも述べられている通り、本書はテクスト分析の①理論書であり、テクスト分析の②実例集でもありながら、③小説表現史、④近代文学史を学ぶこともできる書となっている。重ねて、私見では、本書は①～④としての意味を持ちながら、近代文学を専攻する学生にとって、先行研究のまとめ方や問題点、そうした点を踏まえ、自らがどうテクストを分析し論じるのかといった過程そのものの参考／実用書ともなっている。

まず、本書の性質と構成を確認してみたい。本書で取り上げられるテクストとしては、近代日本文学における重要な作家・作品が並んでいる。以下にその作家・作品群を確認してみると、夏目漱石『夢十夜』「第一夜」（第2章）・森鷗外「高瀬舟」（第3・4・5章）・芥川龍之介「南京の基督」（第6・7・8章）・川端康成「伊豆の踊子」（第9・10・11章）・岡本かの子「老妓抄」（第12・13章）・太宰治「桜桃」（第14・15章）であ

る。なお、巻末にはこれらの作品の本文（全文）も掲載されており、本書を読みながら、分析対象自体（当該作品）も確認することが出来る。

構成に関していえば、各作家・作品のトピックは前後半にわけられ、前半では、その作家・作品の評価史や先行研究状況が簡潔ながら重厚にまとめられている。そして、後半では前半の議論における問題点を引き継ぎながら、主にジェラール・ジュネット／花輪光・和泉涼一訳『物語のディスクール　方法論の試み』（書肆風の薔薇、昭60）の物語論を援用しながら、テクストを、理論（焦点化／話法（距離）／語りの時間／語りの水準など）を用いて分析的に読むという試みの実践がなされている。

こうした前後半の構成は、大学のゼミナールにおける標準的な作品研究のスタイルと一致しており、本書がテクスト分析の入門書にとどまらず、近代文学研究の参考／実用書としての意味合いも持っていることを示している。

特筆すべきセクションとしては、川端康成「伊豆の踊子」（第9・10・11章）と岡本かの子「老妓抄」（第12・13章）が挙げられる。この二つのテクストに関するセクションは、前までに学んだ理論・ポイントも活用しながら、議論自体が作品論として成立するような、高いレベルでのテクスト分析（＝実例）がなされているからである。

前者では、前半では川端康成及び、その代表作である「伊豆の踊子」の評価史や研究史におけるマスメディアの機能と作品のカノン化ついての問題がわかりやすくまとめられてあり、後半では、「伊豆の踊子」の語り手である「「私」の内面」が審議され、メタ的な視点で「私」がこのテクストを語った意義が示されている。

後者では、本書が唯一取り上げる女性作家の評価をめぐる、作家イメージの形成の過程について、簡潔かつわかりやすくまとめられており、後半では、「老妓抄」の語りで特徴的な話法の用法に着目しながら、小説内「作者」や和歌で結ばれるテクストの語りの技法について、高度な分析が展開されている。

全編を通してではあるのだが、特にこの二つのセクションは多くの先行研究を持つ作品の評価史・研究史のまとめ方の参考にもなるし、そこから切り口を見つけ、いかにテクストを分析し論じるかといった点でも、すぐれた手本となっている。

今まではテクスト分析の入門書として、その代表的なものと言えば、前田愛『増補　文学テクスト入門』（ちくま学芸文庫、平5）や石原千秋（他）『読むための理論』（世織書房、平3）などがあった。これらは有益かつ便利な本であったものの、テクスト至上主義側面も強く、その価値は不変であるとしても、文学研究をとりまく状況も変化しているわけで、実用書としてはいささか古く、有意義に活用することは難しくもあった。

そういったなかで、テクスト分析の入門／実用書である本書は、研究者が主には近代文学研究を学ぶ者のために同じ作業を

通して、テクスト分析や、要所では文学研究の方法や考え方を提示している。こういった種類の本は現在まで少なかったし、大学における近代文学研究教育に求められる点が実例されているから、本書を読みながら、もっと早く本書に出会っていれば、もっと早く出会いたかったと思うことが度々あった。本書が、はじめに書いた問い――テクストを分析的／研究的に読むというのは、具体的にはどういったことなのか――を解決するための手助けをしてくれると思ったからだ。未だその問いの答えは模索中であるものの、『テクスト分析入門』はその手掛かりになるし、本書をもって問い自体を問い直すことも出来る。

個人的には、以下の点にもう少し言葉を割いて欲しかったように思う。第15章にて、「テクストから得られる実り」と述べられているが、全編を通して「〝いかに書かれているか〟」を問題にし、「見えにくい読みとり・説明を持続的に展開していく意思こそが、テクスト分析最大のポイント」としているわけだから、こうした抽象的な表現でなく、「実り」自体を具体的に示して欲しかったと思う。もちろん、こういった表現がターゲットとなる読者（層）や本の性質によることも理解できるし、一貫してテクスト分析の技術的側面にことばを費やす姿勢には尊敬の念を抱くのではあるが、このようなすぐれた入門書を書く研究者の方々が、「テクスト分析」にどのような「実り」を感じているのかを知りたい人間も多いはずだ。

最後になるが、個人的な経験に基づくと、「テクスト分析」を「読解」や「解釈」と混同してしまい、苦労した経験がある。テクストを面白く、自分らしく読まなければならないと思っていて、けれど、面白く、自分らしい読みなど簡単に出来るはずもなく、テクストを読むこと自体がいやになったことも長い期間あった。今になれば、読みの面白さや自分らしさとは、独りよがりな「読解」や「解釈」と表裏一体の関係であると思う。テクストが自分にはどう読める（可能性がある）のか（「読解」・「解釈」）ではなく、テクストに記されていることを他者と共有し／するために、テクストがどのように語られ／書かれているのか――、テクストが「〝いかに書かれているか〟」――を明らかにすること。それこそが「分析」である。

今現在、こういった苦労や悩みを持った学生／院生も少なくないと思う。『テクスト分析入門』はそういった学生／院生の手助けになるのみならず、作家・作品に留まらず、近代文学を学ぶうえで、教養や基礎知識の面でも教えてもらうところが多い。

自らの立場・経験を踏まえたうえで、近代文学を専攻する学生／院生にはぜひ『テクスト分析入門』を読むことをおすすめしたい。

（二〇一六年一〇月一四日　ひつじ書房　二〇〇〇円＋税）